

002	Obscuration
007	U T S U W A
037	solarfault
069	5 dreams
119	fragments

Written by Swimmers



# UTSUWA

佐藤 芙有

## 一、野田映子のハイテンションな撮影

バスッ・バスッ・バスッ。撃たれる、嘸みとられる、奪われる。

そうして、ポロポロスカスカになつていくコたちがいる。

「いいよ、目線こつち」

撮られて穴があいていくのなら、まだマシか。最初は中身があるってことだもんね。はじめつから、とられるための何も持っていないコたちも多い。それらはただの数合わせ。雑誌や広告には何人か複数の被写体が必要だから、質が落ちても人手はいる。その中で本命はごくごく少し。

「もつとにらんで。視線つよく。そう、挑発するように」

撮られてスカスカになるコも、はじめから問題にならないコも、この業界には数合わせとして必要だわもちろん。でも。

「ダメよ、そんなじゃ足りない。そう、もつとちようだい。もつと。そう、今の流し目いいわ。つきはなしといて、引き寄せるのよ、こんどは甘えた表情して」

私は、数あわせには興味はない。ホンモノを撮る。それは、私がいままでキャリアを築き上げ、勝ち取った権利だもの。私が、本物を見つけて、私が、撮る。

私の目の前で、カンタは蝶のように踊る。このコは本物。私もはじめて会うくらいの逸材。すごく美しい。

例えば今回の撮影のように、ただの白いバックを前に撮るときでも、彼の頭はイメージで満ちているように見える。私はカンタの甘さを撮りたい。若い傲岸な肌の内側に封じ込められた甘い水分を撮りたい。

—— とうかな、映子さん。

カンタはそれを汲み取り、表現してみせる。私のイメージに合ったシチュエーションを、頭の中ですばやく組み立てて、その中で演じるのかもしれない。カンタはいつさい口には出さず、そういうことをする。というより無意識なのかもしれない。無意識に、自分の上にイメージを映し出す術を知っている。

「ありがとうございます、映子さん」

一度脱ぎ捨てた白いシャツを身につけながら、彼が挨拶してくる。

「うん、カンタすごくよかったよ、今日も。」

一瞬眉毛をひょいっとあげておどけた表情をしてから、目を伏せてはにかむ。小さな目を縁取

る長いまつげが、頬に陰を落とす。すつと尖った鼻梁、赤くつやつやした唇。口をつぐんで内向的な面をのぞかせたかと思うと、すぐにこちらの目をまつすぐに見て言つてのける。

「映子さんが撮ってくれるからですよ」

くるくる変わる印象がイイ。それに、相手を気持ちよくさせる術を知っている。もしかしたら、他の平凡なコたちと同様に、そういう仕草は彼の中の媚態や自尊心から生まれるのかもしれない。それなのに、他のコたちと違うのは、その利己心の生っぽい部分をパーセントも表に出すことなく、上澄みだけをこちらに感じ取らせることだ。

もちろん、キャリアを積みながら、余分な部分を削ぎ落とし、自分にとって必要最低限なものだけを選び取つてうまく扱えるようになる俳優やモデルはいる。ただし反比例して、みずみずしさが減ってくるか、過去の重みが目立つようになってくるか、否応なく付随してくる現象がある。それらのものは、私にとっては余計なものに映つてしまう。平たくいえばフレッシュでなくなつてしまうのだ。

でも、カンタは十七歳。去年デビューしたばかり。ほとんど経験がないのに、自意識をおおせないという能力を持つ。おそろしくカンがいいのか、才能なのか。まだよくわからないけれど、このコは本物だと私は確信する。

どんなにハードスケジュールを組まれ、目の前でシャッターをきられても、すり減らないし、

ポロがでない。体の内部のドロドロした部分は、まるではじめから存在しないように、表面のサラサラ肌と、そのすぐ下の透明な水分だけを感じさせる。

まるで、どこかに魂を移しているみたい。目に見えている体をどれだけ攻撃しても、ダメージを与えられない妖怪のように。この世界には、あのコの本質は存在していないみたいに見える。どこか別のところに、核の部分を預けているんじゃないかしら。

現場のスタッフに一通り挨拶を終えたカンタが、今一度私に向かって花のように笑いかけ、挨拶をする。

「それでは、おつかれさまです、映子さん」

キュウツと、心臓をつかまれたみたいになる。すごくかわいい笑顔。このコの核の部分まで、私は知りたい。きれいで甘い外側を歪ませて、ドロドロしたもので私が引き出したい。このコの表面じゃなくて、実態も私の手で暴きたい。

## 二、ミツさんのみつ豆

半透明の寒天をサイの目状に切る。すだれを垂らした窓から、まな板を載せたボウルが置かれ